

## 第 35 号

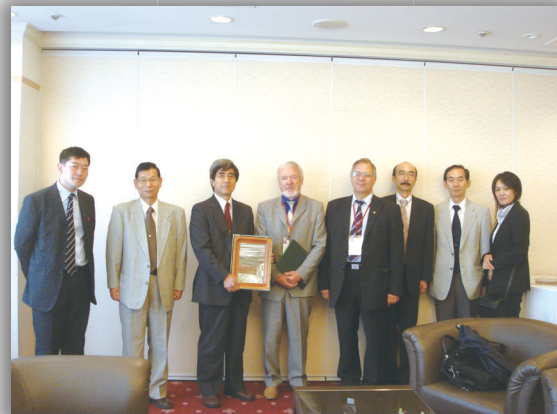
## ● 目次 ●

巻頭言：東北大学百周年に寄せて .....	1
東北大学・ロシア科学アカデミー・シベリア支部学術交流締結15周年記念国際シンポジウム .....	2
07' 片平まつり&創立百周年祭 .....	3
平成19年度アジア・アフリカ学術基盤形成事業「東アジア出版文化国際研究拠点形成及びアジア研究者育成事業」 .....	4
東北大学東北アジア研究センター・モンゴル科学アカデミー歴史研究所共催シンポジウム .....	4-5
シベリア便り .....	5
センター共同研究 研究会 .....	6
最近のセンター研究会・講演会 .....	6
最近のセンター出版物 .....	6
センター客員教授紹介 .....	7
センター新メンバー紹介 .....	7
活動風景・編集後記 .....	8



## 東北大学百周年に寄せて

東北アジア研究センター センター長 瀬川 昌久



ロシア科学アカデミー・シベリア支部との学術交流協定更新の調印式を終えて。  
 中央から：同支部モロディン副総裁、左：東北大学庄子理事、右：同支部フォーミン総裁主席補佐、  
 ならびに東北アジア研究センターの関係者。（平成19年8月7日27日、ホテルメトロポリタン仙台）

本年、東北大学は創立百周年を迎えました。それを記念すべく、6月22日の創立記念日以来さまざまな行事が全学的に行われて参りました。特に8月の下旬には、世界各国の協定校の代表などを来賓として招いた盛大な記念式典が挙行されました。本センターは、こうした歴史ある東北大学の中では昨年10周年を迎えたばかりの若い部局ではありますが、この百周年記念イベントに合わせて、独自の記念行事を行いました。まず、8月23～25日には、本センターが中心となって大学間学術交流協定を結んでいるロシア科学アカデミー・シベリア支部のモロディン副総裁らを招聘し、記念シンポジウムや講演会を開催しました。これは、同支部との交流協定が今年ちょうど締結15周年の節目にあたり、更新の調印式等を行う予定であったことから、百周年記念行事期間に合わせて行ったものです。また、この他にモンゴル科学アカデミーの総裁・副総裁、ならびにモンゴル科学技術大学の学長・副学長らも、本センターが世話部局としてその接遇を

行いました。このようにして百周年記念イベントを機会に本センターと関わりの深い海外の学術機関の代表者を招き、シンポジウムや意見交換を行ったことで、互いの信頼関係と交流の絆を一層深めることができました。これら海外の協定校との交流事業の他に、百周年記念関係の行事としては、8月24・25両日にわたって片平キャンパスで百周年記念祭りに参加し、地雷探知レーダー技術の実演やモンゴル式住居（ゲル）の屋外展示など、日頃の研究活動の一部を一般市民にわかりやすい形で公開展示しました。以上のように、百年間の東北大学の歴史の中に本センターもしっかりとその足跡を刻むとともに、次なる百年の歴史に向けてスタートを切ることができました。大学や研究施設の未来については、さまざまな検討が行われている最中であり、今後も大きな変動が予測される場所ですが、この百年の記念イベントを1つの節目として、わがセンターも未来を見据えて邁進して行ければと考えております。

## 東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部 学術交流締結15周年記念国際シンポジウム

東北大学百周年記念行事の日程にあわせ、8月23日～25日までの3日間にわたりシンポジウムを開催した。初日は、I S T C（国際科学技術センター：International Science and Technology Center）と共催でジャパンワークショップを仙台国際センターで開催した。二日目は共同研究に関連する専門分科会と東北アジア懇話会主催レセプションを仙台国際センターで開催した。三日目は、金属材料研究所講堂で市民講演会を開催した。

I S T C ジャパンワークショップが本学で開催されるのは、昨年10月に続いて2回目である。文部科学省科学技術・学術政策局 末広峰政 国際交流推進官の挨拶で始まり、主にロシア科学アカデミーの研究成果を日本へ技術移転することを含め、新たな学術共同研究の契機につながる発表が多く行われた。

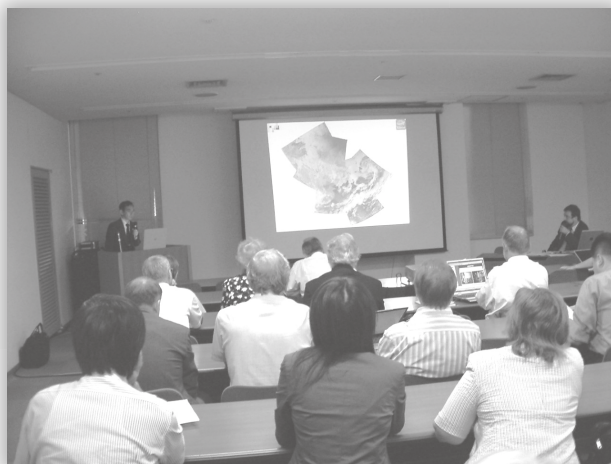
専門分科会では、これまでロシア科学アカデミーシベリア支部と共同研究を行ってきた東北アジア研究センター、金属材料研究所、流体科学研究所、多元物質科学研究所、農学研究科、文学研究科が中心となり、森林環境科学、生態科学、材料科学、表面科学、植物生産科学、考古学など多岐にわたって報告が行われた。これまでの成果をまとめると、この分野だけでも共同研究の共著論文が300編を越えたことが分かった。このように、本センターを中心としたシベリア支部との共同研究は学内で着実に実績を上げている。

記念祝賀会には、ロシア科学アカデミーシベリア支部からV.I.モロジン副総裁、V.フォーミン総裁主席補佐をはじめ12名以上のロシア人研究者が参列した。日本からは文部科学省研究振興局学術機関課 松永賢誕 課長補佐をはじめ、井上総長、西澤元総長、庄子理事などの本学関係者、さらには都合により出席できなかったため、在日ロシア大使館ならびに外務省からも祝電が寄せられ、これまでの共同研究の成果だけでなく、今後さらなる協力関係を構築する契機になった。

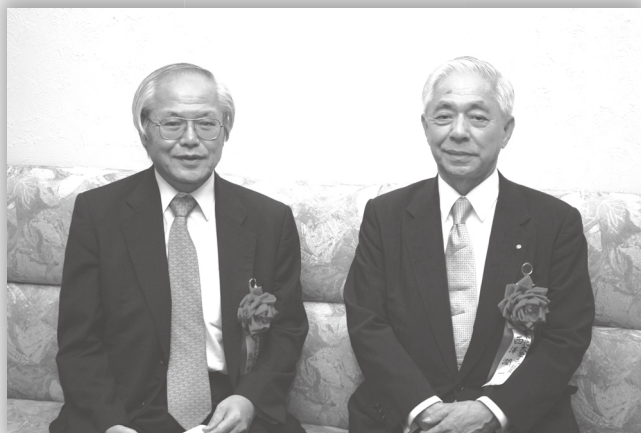
市民講演会では、昨年仙台市博物館で開催されたアルタイ展に出展したミイラの発見者のV.I.モロジン副総裁の講演と今後ロシアからの輸入も含め現在最も輸入食品に関心が高まっている中で輸入最前線の立場から仙台検疫所毒島幸一食品監視課長から輸入食品の安全確保を目指しての講演が行われた。会場は立ち見も出るほどの人で埋め尽くされ、市民の関心の高さがうかがわれた。

今回の15周年は一つの大きな節目であり、共同研究を通して本学が果たしたロシアとの学術交流の役割だけでなく、本学を通じた新たな研究分野での共同研究、あるいは、東北各地の大学や研究機関との共同研究の進展が見られた。さらに、シベリア支部だけでなく、ロシア科学アカデミー極東支部と本学の共同研究の発展も十分視野に入っていることが明になり、ますます、本センター、特に日本館（シベリア連絡事務所）の役割の重要性が改めて確認された。

（工藤純一）



シンポジウムでの発表風景



記念祝賀会での徳田昌則元センター長と西澤潤一元総長

## 2007 片平まつり & 創立百周年祭

今年、東北大学では、創立百周年を記念して様々な記念事業を行ないました。隔年で実施される附置研究所等一般公開、通称片平まつりも開催年をずらして7月28日・29日両日に実施されました。翌月の25・26日には、全学の百周年祭が片平でやはり挙行されています。本センターも、研究紹介を兼ねて双方の祭事に参加しました。この場を借りて、片平まつりの事業について紹介し、次いで百周年祭での内容にふれたいと思います。

### [片平まつり]

本センターには片平地区での活動拠点がありませんので、今回も流体科学研究所のご好意のもと、2階講義室を借用し、資料展示と探査操作のデモンストレーションを実施しました。今回は、「ひやり！とした感覚」というテーマのもと、「シベリアの氷の風にひやり！」、「アジアの地雷にひやり！」、「闇に浮かぶ中国人形にひやり！」と、真夏に即した企画としました。展示会場は奥村誠教授が設計をし、最初の入口には、東北アジア地域を示す現代・古代の地図とパネル展示コーナーを設けました。次は、高倉浩樹准教授の「ユーラシア北極圏にくらすモンゴロイドの人々 トナカイを飼い、狩りに生きる」コーナーで、シベリア世界を見学をすることになります。

天井からそそがれる冷気のもと、北極圏のイベント人とイベントキ人の民俗・生活文化を、パ

ネル写真や映像、毛皮製品などの実物展示によって紹介しました。見慣れないブーツや写真などに、参観者の人気を集めていました。シベリアをぬけると、次は佐藤源之教授の「地雷探知機ALIS（エーリス）で地雷を捜してみよう」コーナーです。ここでは、カンボジ

アなどに広がる地雷原に見立てた実験場で、地中レーダーを作った地雷除去作業のシステ



片平祭り会場にて



佐藤研展示〈地雷探知機 ALIS（エーリス）で地雷を捜してみよう〉（片平祭り）

ムを、実地操作を通して来場者にわかりやすく紹介していました。研究室の助教・院生による指導に、見学の子供も大人も、地雷のもつ恐ろしい意味を十分理解できたと思います。東南アジアでの恐怖の体験後は、「中華世界の絵本と人形ワールド ディズニーもドラえもんもおらいの子分だい」という、中国の人形ワールドに入ります。今日、パクリという批判を受ける中国、しかし、むかしを見ると、けっこうアニメのスターがいたことがわかります。そのことを示すため、三国志ものがたりの本、西遊記の猪八戒像などを展示しました。子供たちには、かげえ人形（皮影戯）が人気を博し、天井一面にひろがる色とりどりの人形に「きれい！！」と連発していました。

フィールド分野、理工分野、そして文学系分野3つに分けた展示会場は、例年より明るく、企画内容は本センターの性格を良く示すものと言えましょう。

### [百周年祭]

8月下旬、片平に巨大な祝賀会場が設けられる中、本センターも他部局と肩を並べて展示会場を設けました。理工系分野は佐藤研究室が本部建物内に、地雷探知機ALISによる地雷除去のデモンストレーション会場を設置しました。人文系では、岡洋樹教授が片平南門近くの国際広場の中央に、ゲルを設置し、モンゴル文化を紹介する会場としました。人道的対人地雷除去を体験する北門会場には、隣室の総合博物館から購入したと思われる宝石らしい「小石」を片手にした見学がつかめ、研究室のスタッフから説明を受け、実地操作の体験をしていました。南門会場は国際屋台村の中心ということで、ゲルには黒山の人ばかりで、モンゴルからの留学生による演奏や歌唱（ヌオミー）も手伝って、ひとときの真夏の昼の夢を過ごしました。一連の楽しい企画の中、

我々センタースタッフ全員は、炎天下のまばらな木陰のもとで、大変な思いなどを経験しました。

なお、この他に本学では、東京江戸博物館で「東北大学の至宝展」を9月1日から開始し、本センターでも山田勝芳教授や私が関係しています。目下、仙台市博物館での至宝展を執行中で、祭礼にあけくれたおめでたい年でした。



モンゴルのゲルの中で（百年祭）

（三者祭り実行委員 磯部 彰）

## 平成19年度日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業 「東アジア出版文化国際研究拠点形成及びアジア研究者育成事業」

本プロジェクトは、日本学術振興会の委託を受けて東北大学が実施するもので、本センターが今年度から開始した研究ユニットとしての性格も持ち、平成19年度から21年度の3年間の計画で4月からスタートしている。代表者は磯部が務め、中国の復旦大学・中国古代文学研究中心（代表黄霖教授、研究中心長）及び古籍整理研究所と韓国の高麗大学校・文科大学（代表崔溶澈教授、中国学研究所長）3校がそれぞれ拠点を設けて、共同研究とセミナー、研究者交流を行なうもので、平成19年度は全国で5校が採択され、その内の一つの事業である。参加者は、日中韓3国以外、フランス・ニュージーランド・ロシア・アメリカなどの研究者がいて、多国籍に亘る。

本年8月、まず共同研究などを兼ねて、上海の復旦大学にて高麗大学校の崔溶澈教授らと共同研究及び国際学会及びフィールド調査を行なった。その後、9月28日・29日の両日、北海道・伊達市にてセミナー「東アジアむかしの本のものごとり」及び併設展「東アジアむかしの本のものごとり展」を実施した。北海道で開催することになったのは、本センターと伊達市噴火湾文化研究所と学術交流協定を結んでいて、今回のセミナーには、伊達市噴火湾文化研究所の共催をいただいていたためである。セミナーは、だて歴史の杜カルチャーセンターにて、「東アジア郷村社会における知識の普及—出版による文化的社会の形成」をメインテーマとし、明代のカラー木版印刷、朝鮮王朝時代の中国詩歌選集の出版事業、日本五山版による地方文化の形成などについて復旦大学・高麗大学校・慶応大学・鳥根県立大学・富山大学・一橋大学・神奈川大学等の参加者による講義と討議の他、「地域の文化事業と人材育成」という題目で伊達市噴火湾文化研究所と東京・書道博物館の研究者からの現状紹介、沖縄現代文学作品の出版と

社会をめぐるニュージーランド・カンタベリー大学の研究者による講義と討議などを行い、盛り沢山の内容の研究会を実施した。一方、伊達市信用金庫・伊達アカデミックコンベンションビューローの後援を受け、伊達信用金庫本店コスモスホール会場では9月25日から29日まで、中国や日本、韓国、ベトナム、チベットなどの書物、陶俑、絵画等を100点余り展示し、来場者に院生の教習を兼ねて特別講義とギャラリートークなどを実施した。NHKや北海道新聞、室蘭新報社や読売新聞支社の放送・掲載もあって、当地の人々が積極的に足を運んでくれたようである。洞爺湖サミットに先行する企画には、伊達市長菊谷秀吉氏をはじめとする市の方々やボランティア「かけはしの会」の方々が熱心に参加していただいて、地域社会に溶け込むことが出来た。国内外の研究者も、伊達市の文化と自然を、噴火湾文化研究所の役員による案内で十分満喫できたとのことである。

来年は上海で、再来年はソウルで本プロジェクトは行なわれる予定である。  
(磯部 彰)



## 東北大学東北アジア研究センター・モンゴル科学アカデミー歴史研究所共催 シンポジウム「モンゴル史研究の新動向、当面する問題(17～20世紀初頭)」

東北アジア研究センターは、これまで学術交流協定に基づきモンゴル科学アカデミーと二回にわたりシンポジウムを共催してきた（2003年9月歴史研究所、2005年12月国際研究所）。今回はその三回目となる。今回は本センターとアカデミー歴史研究所が共催し、平成19年9月6～7日、ウラーンバートル市東部のアカデミー研究所第一合同棟4階会議室で開催された。まず歴史研究

所長 Ch.ダシダワー氏、モンゴル科学アカデミー総裁 B.チャドラー氏、本センター長瀬川昌久氏（岡が代読）による開会の辞の後、日本5名、モンゴル国12名、ロシア1名（代読）、中国3名（内2名代読）の参加者による合計21件の報告が行われた。また会場には駐モンゴル国ロシア連邦大使館主席書記官ガンジューロフ氏、ロシア連邦カルムイク共和国大統領補佐官 E.V.ポカニノヴァ

女史も出席され、それぞれ挨拶の言葉を述べられた。

今回のシンポジウムは、1990年代以来のモンゴル国における清朝支配期モンゴル史の再評価の流れの中で開催された。それゆえ各報告は個別の問題を論じつつも、社会主義時代の既存の歴史認識とは異なる清代史像を提示しようとするものであった。特に冒頭のモンゴル国立大学教授 J.ボルドバートル氏の報告「歴史研究の新しい動向について」が、「満・漢の植民地支配」と規定されてきた清朝の支配について、大英帝国に似たドミニオンであったとする新見解を表明したのをはじめとして、近年の文書史料など新出史料を用いた研究成果が披露された。新学期開始直後の多忙な時期にも拘わらず、モンゴル国内の研究機関・大学より多数の研究者が出席し、活発な議論が行われた。また本シンポジウ

は、新聞二社、テレビ局二局の取材を受け、報道された。(岡洋樹)



シンポジウム会場の模様

## シベリア便り

室蘭工業大学とSB RAS無機化学研究所の共同セミナー《Russia-Japan Seminar on Advanced Materials And Processing》が9月16日～17日に開催されました。これはロシア基礎科学財団との共同研究「金属を添加した希土類硫化物の合成とその多結晶および単結晶体の熱電特性評価」の一環で行われたもので、日本からは室蘭工大の他に産総研や一般企業からの参加があり、ロシア側もノボシビルスクの他サクトペテルブルグやダゲスタン共和国からの参加がありました。また、9月18日～19日にはノボシビルスク・アカデムゴロドクで第10回北東アジア天然ガス&パイプライン国際会議(NAGPF2007)が開催されたため、まだ秋の日差しが柔らかいアカデムゴロドクは外国人たちで溢れかえっていました。今

年のノボシビルスクはロシア科学アカデミー・シベリア支部が創立50周年という事もあり、あちこちで様々な催しが企画されているようです。10月には第4回ロシア・カザフスタン国境地域フォーラムの開催地にもなり、アカデムゴロドクはフォーラムの一環である円卓会議の主要会場に選ばれました。国際的にも重要な催し目白押しのノボシビルスクでは、今年はシベリアの首都としてその力量が問われる試練の年と考える人もいるようです。果たしてその評価はどう出るのでしょうか？今後もノボシビルスクから目が離せません。(徳田由佳子)



室蘭工大・無機研共同セミナーの参加者（無機研前にて）

## センター共同研究 研究会

### 「旧ソ連を中心とするポスト社会主義世界におけるマイノリティ・ビジネスの展開と私的所有観生成についての学際的研究 第4回研究会」

2007年9月19日（水）午後2時から6時にかけて、本共同研究の第四回研究会を開催した。今回は、京都大学大学院博士課程の高原浩子氏による「現代モンゴルにおける物資流通過程－商業者の動態からみる地域間関係」と、東北大学東北アジア研究センター客員教授ヴァンダ・イグナティエヴァ（ロシア・サハ共和国アカデミー人文科学研究所）による「Labour and Poverty of the Siberian Indigenous Peoples: Unchanging Process of Colonial Setting in Yakutia」の二本の研究発表を行った。

高原氏は、ポスト社会主義モンゴルにおいて自由で小規模な流通業者＝商業者が出現する社会経済的文脈をふまえながら、国境内外をこえて移動する物資が、モンゴル国内外の地域間関係にいかなる影響を与えるかについて報告した。社会主義流通体制崩壊後のダイナミックなモノと人の流れを浮き彫りに

する興味深い発表だった。イグナティエヴァ氏は、サハ共和国における近年のエネルギー開発・鉄道建設などのインフラ整備をふまえながら、共和国内にみられる労働と移民、貧困の構造について発表した。それは共和国における小規模ビジネス生成の背景を明らかにすると同時に、内国植民地としてのシベリアとロシア人と少数民族の対立の原因を分析する刺激的な考察だった。



研究会終了後、懇親会参加者で記念撮影

（高倉 浩樹）



## 最近のセンター研究会・講演会



### 東北アジア研究セミナー

2007年7月からほぼ一月に一度の割合で、「東北アジア研究セミナー」が開催されている。その趣旨は、文系・理系双方の多分野からなる東北アジア研究センターの個人研究の展開を相互にじっくりと聞く機会を設け、専門分野の枠を超えた議論の面白さを堪能するためである。発表は1時間、討論1時間で、文系と理系双方の立場からのコメントが付き、毎回白熱した議論が続いている。

7月23日 第1回「清朝のモンゴル統治と災害：年輪気候学資料の利用とその可能性」岡洋樹、コメンテーター：上野稔弘・鹿野秀一

9月25日 第2回「Multidisciplineはなぜ必要か：バングラデシュの飲料水ヒ素汚染問題を事例に」坂本麻衣子、コメンテーター：宮本毅・高倉浩樹

10月22日 第3回「正義に適った税制とは：自由主義思想の視点から」八島隆之、コメンテーター：石井敦・奥村誠  
（高倉 浩樹）



## 最近のセンター出版物

平川新監修「『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係』第二集」（2007）

2004年に出版した第一集に引き続く、開国前の日露関係を示すロシア史料の翻訳集である。1760年代から1790年代までの49点を収録した。内容は、ロシ

アが千島列島を南下して日本に接近してくる過程の史料が中心となっている。帝国ロシアや毛皮商人によるアリュート人やアイヌ支配の進展なども具体的に把握可能であり、日本人漂流民大黒屋光太夫を根室に送還した遣日使節ラクスマン関係の史料も収録されている。

## 客員教授紹介

### トモルバガナ (特木爾巴根)



2007年10月1日から、トモルバガナ(特木爾巴根)先生がセンターの客員教授として赴任された。先生のご専門はモンゴル古代文学とモンゴル文学で、現在内モン師範大学教授であり、同大学の蒙古学学院(モンゴル学研究センター)の院長を務めている。

センターには2008年1月15日まで滞在し、「東北アジア民族文字・言語情報処理ユニット」(研究代表:栗林均)の研究協力者として『元朝秘史』の文献学的研究を行う。『元朝秘史』は、チンギス・ハーンの一代記を中心にモンゴル族の歴史を綴った歴史書であるが、13世紀にモンゴル文字で書かれた原文は失われ、14世紀後半に漢字でモンゴル語の

発音を写した「漢字音訳本」だけが現代に伝わっている。トモルバガナ先生は、『元朝秘史』の異本の探索と研究を精力的に進め、これまで学界に知られていなかった写本を次々に「発見」し、それらの特徴を紹介するというめざましい業績を挙げ、成果を『《蒙古秘史》文献版本研究』(内蒙古教育出版社、2004年)として出版している。

日本では、世界に先駆けて『元朝秘史』の完訳を成し遂げた那珂通世博士の『成吉思汗實録』(大日本図書、1907年)以来、多くの研究が行われてきた。百年の伝統と実績をもつ日本の『元朝秘史』研究の情報を収集することも今回の滞在の目的のひとつとなっている。

先生は、図書館で目録類を探索することを無上の楽しみとしており、赴任早々から図書館に通っている。(栗林均)

### Voytishkek Elena ボイティシェク・エレナ



ノヴォシビルスク国立大学  
人文学部東洋学学科長  
Key words: spiritual culture of  
Asian region アジア地域の無形文化;  
intellectual games 知的な遊び;  
"hieroglyphic thinking" 漢字文化に  
根ざした考え方; game theory ゲーム  
理論。

ボイティシェク・エレナ助教授は1961年にウファ市で生まれた。1979-1984年ノヴォシビルスク国立大学言語学部言語文学科で中国・日本文化史料研究を学んだ。1984年に同大を卒業後、ロシア科学アカデミーシベリア支部 考古学・民俗学研究所中世史研究室に入り、現在同研究所シニア・サイエンティストとして勤務している。1999年からはノヴォシビルスク国立大学の人文学部の東洋学学科を兼務し、中国文学・日本文献学に関する講義をしている。2002年に学位論文「日本無形文化における知的遊びの役割」で歴史学博士(Ph.D.)を取得し、2005年に助教授に昇任した。2003年より同大学の人文学部東洋学学科長を兼務している。

研究テーマは東アジア地域の無形文化で、知的な遊び、漢

字文化に根ざした考え方、ゲーム理論を研究している。日本における知的遊びの理論についての歴史的・民族学的研究では、日本と中国の伝統文化の間にみられる歴史的、文化的相互関係に関する研究をより一層深めようとしている。特に、人間の精神性の特異で真似のできない特徴をよく反映する知的遊びの起源と伝統に関わる資料を蒐集し、研究の深化をはかろうとしている。

学術活動では他国への訪問もし、日本においては2006年9月-12月の間日本国際交流基金の日本研究フェロシッププログラムによって、札幌大学文化学部にて外国人研究者として研究・調査等の活動を行なっている。

著書として、かるた遊び、「源氏物語」に見られる日本伝統遊戯文化の起源に関する娯楽などの研究書5冊のほか、大学教育用教科書、学術論文50本などがある。

今回、客員教授としての招聘期間中、京都方面へ訪問し、古文獻にあたって、茶道・香道における花月札、十種香札など擬似的娯楽に関する資料を収集し、他の競い合う娯楽との比較考察、もしくは細分化を試みたいとのことである。新しい世代のロシアの東洋学者として、ボイティシェク先生の活躍が期待される。(磯部 彰)

## センター新メンバー紹介

### 牧野 友紀



2007年6月から教育研究支援者として勤務している牧野友紀です。「東アジア出版文化国際拠点の形成研究ユニット」の支援業務を行っています。具体的には、東アジアの出版文化に関わる国際的な研究交流の推進、東アジア諸国に現存する出版資料のデジタルデータ化を行っています。東アジア地域特有のコミュニケーションプロセス、その情報化について考察しています。

専門は社会学説研究、農村社会学です。西欧で誕生した資

本主義は人間のあり方をどのように変容させるのかという関心のもと、一方でアダム・スミスの「同感」理論の研究を行い、他方で、昭和恐慌期における東北農村の生活とイデオロギーの関係を実証的に考察しています。

本センターに勤務して以来、数多くの学問的刺激を受けています。他分野の先生方と接するたび、「マルクスからスミスへ」の問題について考えるヒントをいただいている気がします。人が集う場所が好きなので、多目的ルームによく出向き、コーヒーを飲んでいきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



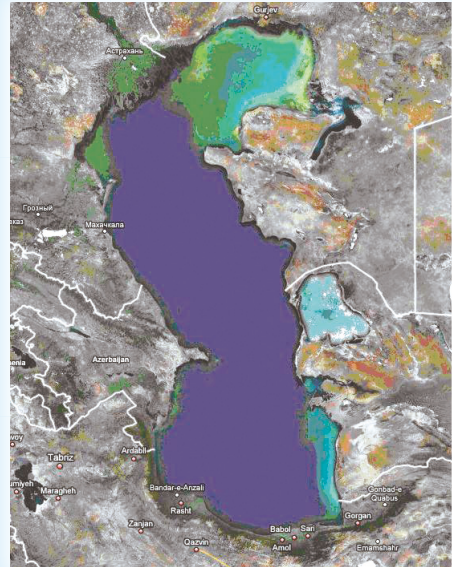
## カスピ海の資源をめぐる沿岸国の国際交渉過程

(東北アジア研究センター・助教)

坂本 麻衣子

カスピ海は世界で最も大きい湖として知られており、面積は371,000km<sup>2</sup>で、78,200km<sup>3</sup>の水を湛えている。我々がこの湖をカスピ‘海’と呼んでいるのは奇妙な話である。実のところ、カスピ海が‘海’であるか‘湖’であるかを規定する原則は現在世界に存在しない。厳密には、水塊が外洋につながっているものが海で、そうでなければ湖として国際法では定義される。カスピ海を外洋につなぐ自然河川はないので、それならば湖かといえば、人口河川 (Volga-Don運河) によって黒海につながっているため、判定が難しいところなのである。カスピ海が海であろうが湖であろうが単に認識の問題でどちらでも良さそうだが、その認識によって沿岸国への資源の配分の仕方が変わってくるので、沿岸国にとっては大問題となっている。

カスピ海の資源配分をめぐるカスピ海の定義が今さら問題になっている原因は1991年のソ連崩壊にある。1991年以前はソ連とイランによって、なかば内輪合意でカスピ海は湖として認識されていた。湖である場合は、カスピ海の資源は基本的に沿岸国のみで等分される。あるいは沿岸国の合意で任意の配分が可能となる。しかし、ソ連が崩壊し、沿岸国の構図は、アゼルバイジャン、トルクメニスタン、カザフスタン、ロシア、イランの5カ国へと変化した。カスピ海の定義の仕方によって各国への資源配分が変わるため、最近になって活発にカスピ海をとりまいた議論がなされるようになったのである。特にカスピ海が海として定義される場合には、国連海洋法条約にもとづいて中央部は排他的経済水域となり、経済的主権に限定して所有沿岸国の権利を認める代わりに、世界中のいかなる国も自由に航行、上空飛行、海底電線・海底パイプラインの敷設が出来る。



カスピ海と周辺地域 (出典: Google Map)

オーストリア・ウィーン郊外にあるIIASA (International Institute for Applied Systems Analysis) という国際研究機関のPINグループ (Process of International Negotiation) は2006年より、沿岸の5カ国の政府関係者や研究者を集め、カスピ海の資源配分をめぐる議論を促すような対話の機会を先導してきている。これまでに2回の会議が開催され、今回は2008年にカザフスタンで開かれる予定である。筆者はIIASAが催すYSSP (Young Scientist Summer Program) に参加したのがきっかけで、PINグループと共にカスピ海の交渉過程についての研究を始めた。YSSPは毎年夏に各国の若手の研究者50人ほどを集め、IIASAの研究者との研究交流を促すプログラムである。



CaspiLogの様子

(出典: PINPoints Fall 2007, IIASA)

これまでに、沿岸国は5カ国間の中で何らかの合意がなされるまではカスピ海の開発に着手しないという合意に至っている。しかし、カスピ海の底に眠る石油資源に関しては、この合意は無効なようで、ロシアを筆頭に2国間の交渉で石油の開発やパイプラインの敷設へ向けた協定が次々と締結されている。筆者はゲーム理論を用いて、情報の非対称性や意思決定の階層性、パイプラインの建設における石油供給ネットワークの安定性などの側面から、沿岸国が2国間交渉ではなく、5カ国の全体的な交渉へと臨むインセンティブ (動機) を示すことを目的に研究を行っている。



秋から冬にかけても東北アジア研究センターでは様々な行事が目白押しで、ニューズレター35号の編集もついに越年作業となってしまいました。刊行が大幅に遅れてしまったことをお詫び申し上げます。

(柳田賢二)